

に政府の政策策の上にも最も多端に且つ恐らく最も深刻
なる變遷を経験した時代であるが、此の間我が朝野の
態度は必しも常に當を得たりと稱しかたき止むあり
、今日多くの方面に混乱と行詰りとの歎聲をさくやう
な次第である。而して我が社會政策時報は此の難關に
處するに當つて、一部の非難と誤解とに拘らね、終始
一貫鋭く道中正の立場を固守し、冷静に内外社會運動
労働事情の報道を爲し、社會思想及び政策立法に關す
る忠實なる紹介の任に當り、以て本邦社會政策上の正
確なる羅針盤たることを期すると共に、更に進んでは
産業界に労働運動思に、勞資關係に、より大なる正義
と調和とを見出すべし微力を献けてきた。今後我國の
社會狀態は又更に幾變轉をなすつ、國民全体の眞執

なる協力によつて理想を實現してゆくことであらう。
時恰も昭和四年の新春に際して、過去九ヶ年の本邦社
會運動推移の跡を回想し、更らに本誌の立場を嚴守し
つ、社會の進化に對して此のさうとかなる貢献を繼續
せんことを期するものである。

(註) 添田敬一郎「第百號」を發行するに當りて
社會政策時報昭和四年一月號一―四頁

第七項 工場委員會法制定に關する建議

添田常務理事は就任以來多くの爭議調停に積極的に業
り出したことは既に述べたが、大正十年六月藤永田造船
所に爭議の勃發した際に工場委員會制度案を提げてその調
停を試みたことは當時劃期的な事件であつた。この時代